



## 私の抱負

岩佐達子

私はこの3月卒業する。誰しも卒業する時には、それぞれ来し方4年間をふりかえつてみて、感慨無量であろうが、私達衛生看護科学学生にとつて、ことさらその感が強い。他の学科の学生のように、何もかもちやんとできたところに迎えられるのと違って、私達が入学と殆んど時を同じくして新しいもの設立に向かつて歩み始めた状態で、そこには必然的に種々の困難な障得物が私達の目前に現われた。それは今後とも一層私達に、付きまとつてくるであろう。こうした途上にあつて私達が苦しんだり悩んだり考えたりしたのはいい加減ない。

しかし、騎場での教養課程や、専門課程に入つてからの基礎医学等の講義で受けたあのアカデミックな雰囲気は、決して忘れることはできない。この最高学府におけるアカデミック・スピリットが、終始私達を勇気付けてくれた。こうして今や4年の年月も流れようとして世間の理解も徐々に深まりつつあり、ところによつては非常な期待をもつて迎えられるようになっている。学校に入つた以上、所定の学業を終えれば当然に卒業できるのであつて、そのこと自体何の憂いもない。しかし、東大医学部衛生看護学科第1期生が卒業するということは、

東大創立以来の全国でも類例のない学科が新たに設けられ、私とその第1期生として卒業するというに、何かしらプラス、プラスの社会的、文化的意義が自分1人の所為の上にもあるような気もして今は唯嬉しさの中にも緊張を覚える。

入学式の時だった。矢内原総長の祝詞の中に次のような意味の言葉があつたことを思い出す。「病人を治療することには、次の三つの要素が必要である。一は云う迄もなく医師であり、二は薬であり、三は看護である。この三つが一体となつて始めて治療の効果が上がるのであるが、我国では医学、薬学は進歩してきたにも拘らず、看護は医師に従属するものとせられてきた。ところが医師はややもすれば世俗にもいうように、患者を大根扱ひし勝ちなきらいがあり、看護婦がそういう医師のただ手足の役だけをつとめるということにもなりかねない。しかるにアメリカでは、看護婦の地位は我が国のそれよりも非常に高く、医師と対等の社会的地位が認められ、看護学が独立の学問として認められていく。病いを治療するということは、単に医

学や薬学だけが進歩しておれば良いというのではなく、看護学も相共に進歩せねばならない」と。

私はこの4年間、病院における実習等、いろんな見聞の機会を通じて医師と看護婦との関係について考えて見た。世間ではよく看護婦のことを「白衣の天使」という。これ迄の看護婦の医師に従属した低い地位にも拘らず、看護婦に「天使」の尊称を送つて、診断や治療処置を行う医師に「天使」またはこれに相応する尊称を送らない。これは単に看護婦が女性であるからジャヤナリズムが与えたものというだけでなく、病人特有の或る心理状態から看護婦に求める病人の心理を表徴化したものではないかと思ふ。いう迄もなく患者は自己の病気に對しては最も真剣であり何とかして早く回復したいと考える。しかし病氣と云う世界は、健康な時に住んでいる日常の世界とは異つた不案内の世界であつて、常に不安焦燥に陥入り勝ちである。また今日のように国民の教育水準が高まり、国民一般にある程度の医学的知識が進んでくると、場合によつては全く医師を信頼しきつていようようなこともなく懐疑的にもなり易い。

しかるに患者に接している時間は医師よりも看護婦の方が長く、患者自身の気持は医師に對するよりも看護婦に對する方がより軽く且つ開放的である。ここに於いて患者の不安や焦燥が最も端的に看護婦に向けられる。そこで私は病氣を治療すると云うことは病理学的に見た病氣そのものを治すと云うことと、病人特有の心理状況をおさめ、患者と協力しながら絶えず科学的な行動によつて恢復に導くということの二つが総合的な効果をあげて始めて可能であると思

われる。即ち心身共に恢復するのである。前者は医師の分担であり、後者は看護婦の分担である。このように考えてくると、看護婦の地位も素質も、当然に高いものを求められてくるのは、蓋し当然なことである。

さて、私達卒業生の活動分野を見るに、いわゆる Multi-purpose health worker であつて、狭義の臨床看護や保健婦活動に限局されるものではない。たとえ臨床看護にしても、対象とする患者を、あく迄心理的、社会的背景のある人間として見、個々の対象に適した科学の裏付けのある看護をなすことである。かような科学の基礎の上に立脚して個人または公衆の健康を保持、増進させることに活動する。従つて、健康という言葉の定義を考えると、その保持、増進に寄与する活動とは、自ずと広い分野に亘らざるを得ない。

ある人は直接人々に接して保健活動しながら実地に Health care を如何に行うか研究する人もあり、特にテーマを選んで例えば未熟児の専門看護を研究する人、また六学やその他の研究室に入り研究を通じて保健活動をする人、行政を通じて保健活動をする人、教育を通じて保健活動をする人、あらゆる分野に入つて行くこととして、すでに述べたようにどの方面に行こうと民衆の健康を荷負して行こうという熱意には変りない。即ち身体的、精神的、社会的背景のある民衆に接して、医学、社会学、心理学等あらゆる基礎科学を応用して、身体的精神的社会的に健全な生活を確保するために働くことはとりもなおさず人類の平和

に向かう働きである。

私は精神衛生に進むこととした。私がこのような方向を選んだのは、最初にも述べた本来の病氣と患者心理との関係を考える時、人間精神の発達、人格の形成に非常に興味を持つたこと、今後の社会生活の様相が益々複雑多岐になるに従つて、精神障害者の発生も増えることと考えたからである。近年、医学は長足の進歩をなしたことは周知の事実であり、10年前には不治の病と云われた結核も抗生物質の出現や各方面の結核対策により、一応征服できた。しかるに、29年7月厚生省が行つた精神衛生実態調査を見ると、極めて貧困な精神衛生の現状である。これでは治療困難な疾病はあまわしという感が非常に強い。精神障

者だつて人間である。これでは戦時ドイツのヒトラーが、精神病者を全部殺してしまつたのと、どれだけ大きな差があるうか。人類の意志に反しないだろうか。

精神衛生の意義を考える前に、先ず精神の健全なる発達は遺伝的条件、身体的条件等の生物学的条件や、幼児よりの環境条件のダイナミックな働きによりなされるもので、何れの一面にのみ偏向しても、全く片手落ちの取扱いになるという。換言すれば人間は身体的存在であると同時にまた精神的存在であり、更にまた社会的存在で、どの一面をも切り離して考えることはできない。

近年アメリカで盛んに発展した psychosomatic Medicine において強調されているように心身の相関々係や遺伝と環境の問題を考えると、もしも偏向せる見解より健康問題に対処するならば、せつかくの努力も空しいものとなるであろう。あらゆる要因から対象たる人間を照して見て十分なる広い考察を加えてこそ、始めてその効果も期待できるものとなる。今や精神衛生身体衛生の境界はなく、医学、衛生看護学のあらゆる領域において相並んで重んぜられるべきで、この意味においては精神衛生を別個に取上げる問題でない。

国立病院給食研究会編

## 病院給食一般献立

(B 6判・200頁 円250 円30)

## 病院給食治療食献立

(B 6判・180頁 円220 円30)

国立病院に於て実施中の一般食・治療食献立のうちから模範的なものを選びそれに検討を加えたものである。

慶応病院・芦沢千代著

## 病人食餌の実際

(B 6判・200頁 円220 円20)

基本的な四季に亘る献立を示し、応用が自由に出来るよう編集された定本的献立である。

東京都千代田区神田神保町1—39

## 第一出版株式会社

電話東京(29)4576〜7 振替東京23838

私の道は決つた。東大の伝統あるアカデミック・スピリットを忘れることなく人間愛に胸を燃やしつつ行こう。私のような者が大それたことかも知れないが、私には友達がいる。同じくアカデミック・スピリットと人間愛に燃ゆる友達が……。

(東大医学部衛生看護学科 4年生)